日本における国際政治学と外交史研究

千葉商科大学国際教養学部 助教
中村　優介
NAKAMURA Yusuke

プロフィール
慶應義塾大学法学部政治学科卒業。慶應義塾大学大学院法学研究科政治学専攻修士課程修了。エクセター大学大学院歴史学研究科修了。優等修士（歴史学）取得。慶應義塾大学大学院法学研究科政治学専攻後期博士課程単位取得退学。博士（法学）取得。2021 年 10 月より千葉商科大学国際教養学部助教。専門は国際政治史、イギリス外交史。

1　ロシアのウクライナ侵攻と国際政治学

2022年2月24日、ロシアがウクライナの侵略を開始した。ロシアによるウクライナ侵攻は、武力を用いて一方的に国境の変更をしてはならないという戦後国際秩序の原則を、国際連合安全保障理事会の常任理事国であるロシアが公然と破ったという意味において、現代の国際政治を揺るがす大事件である。そのため、各国の政治家や官僚、ジャーナリスト、研究者などはなぜロシアがウクライナ侵攻の決断に至ったのかということを明らかにすることを試みている。

ロシアによるウクライナ侵攻が国際政治学者に与えたショックは大きかった。国際政治学のパラダイムの1つには、経済的相互依存が戦争を抑止するということを唱えるリベラリズムというものがある。戦後の世界ではこのリベラリズムの影響力は大きかったが、ロシアという大国が公然と侵略戦争を起こしたことによって、リベラリズムの地位は脅かされている。

そもそもリベラリズムは20世紀以前から存在していたが、二度の世界大戦が勃発したことによって、リベラリズムは一時的にその権威を失っていた。国際政治学の古典的著書である『危機の二十年』を執筆した国際政治学者のE・H・カー（E. H. Carr）は、リベラリズムをユートピアニズムという蔑称で呼んでいた。カーは、彼らは現実を直視することができておらず、頭の中の理想郷で生きていると考えていたのである[1]。第二次世界大戦の終結後、日本のように経済大国として平和的に台頭したような事例もあったことからリベラリズムは復権を果たしたが、ロシアのウクライナ侵攻によってその地位は再び脅かされている。

また、ロシアのウクライナ侵攻によって質的研究の重要性が見直されている。アメリカを中心として政治学の科学化が進められているが、科学というのは法則を見つけ出すものであり、国際政治という大きな視点からの分析では必然的に個人の個性は過小評価される傾向があった。しかし、今回のロシアによるウクライナ侵攻において、ロシアの指導者であるウラジーミル・プーチン（Vladimir Putin）が果たした役割の大きさを否定することはできないであろう。

例えば、国際政治学者のデイヴィッド・A・ウェルチ（David A. Welch）は、次のように主張している。

> 国際関係論の歩みの中で大きな間違いの1つは、ほとんど完全に個人の性格を無視したことだ。これについて責任があるのは、1つの学派だけではない。「構造的リアリズム」は、重要なのは国力だけで、いったん国力の分布が分かれば、国際システムのふるまいについても理解できるだろうと主張した。
> マルクス主義は階級だけが重要で、本当のところ重要なのは経済的階級の特殊利害と、その力が分かれば、歴史がどのように展開するのか必要なことはすべて理解できると言ってきた。
> コンストラクティビストは、重要なのはエージェ

1　E. H. カー（原彬久訳）『危機の二十年―理想と現実―』〔電子書籍版〕（岩波書店、2015 年）。

ントと構造の相互作用であり、ひとたび適切な社会学的動態が分かれば、世界秩序の進化について必要なことはすべて理解できると語ってきた。

以上のような見方には、いずれも個人の性格という変数が果たす余地はない。もっともコンストラクティビストには若干例外的な部分もあり、彼らも、アレクサンダー大王とか、チンギスカンとかナポレオンのような影響力の大きな個人が、まれには構造に大きな影響を及ぼすことを認めるかもしれない。

どんなロシアの指導者でも、2022年2月24日にウクライナに侵攻しただろうという想像には、説得力があるだろうか？

ミハエル・ゴルバチョフやボリス・エリツィン、あるいはアレクシー・ナヴァルヌイ（もしロシアで自由で公正な選挙が行われていたなら、今頃彼が大統領になっていたかもしれない）のような人物ならそうするだろうか？

私にはそうは思えない。今回の戦争は、ウラジーミル・プーチンによる戦争だ。なぜこの戦争が起こり、それがどのように展開しそうかを理解するには、ウラジーミル・プーチンという個人について理解しなければならない[2]。

ウェルチが主張するように、これまで国際政治学においては個人の役割というものが軽視されがちであった。ところが、こういった流れはアメリカを中心としたものであって、日本にも完全に当てはまっているというわけではない。なぜなら、個人の役割に着目することが多い外交史研究が日本では国際政治学の一部に含まれているからである。対照的に、外交史はアメリカやイギリスでは歴史学部において研究されている。

このように、日本の国際政治学はアメリカやイギリスと比較して特殊なものであるが、ロシアのウクライナ侵攻を受けてこういった特殊性こそが日本の国際政治学の強みであるともいえるのではないか。つまり、アメリカを中心として国際政治学においては個人の役割が軽視されてきたが、日本で行われている外交史研究は個人の役割に重きを置いてきており、理論研究や統計研究と歴史研究を組み合わせることで、より多角的な観点から国際政治上の出来事を分析することができるということである。ここからは、日本における国際政治学と、理論研究・歴史研究の違いについて説明したい。

2 日本における国際政治学と理論研究・歴史研究の違い

日本における国際政治学の研究がアメリカやイギリスのものと大きく異なるのは、外交史研究が国際政治学の一部として捉えられていることである。対照的に、アメリカやイギリスでは外交史は歴史学の一部として捉えられている。したがって、筆者のような外交史を専門とする研究者は日本では国際政治学者（political scientist）として扱われるが、英米では歴史家（historian）として扱われることになる。

すなわち、アメリカで主流である理論研究や統計研究の手法と並んで、日本では歴史研究も国際政治学の一部としてみなされている。このような性質の異なる方法論が混在していることが日本の国際政治学の特徴である。しかし、このようなアメリカとはイギリスとは異なる日本の国際政治学の特殊性は、ロシアによるウクライナ侵攻のような事件を分析する際には有用であるといえる。

まずは、理論研究と歴史研究の方法論の違いに着目したい。理論研究と歴史研究の最大の違いは、理論研究は国際政治における出来事の普遍的な一般化を試みるのに対し、歴史研究は一般化を行わない、もしくは限定的な一般化しか行わないことである。理論研究を行う研究者は「科学」であることを重要視し、例えば戦争がなぜ起こるのかといったような問題に対して、時代や地域を越えた法則を見つけ出すことを試みている。対照的に、歴史家はそのような普遍的な法則を見つけ出そうとはしない。程度の差こそあれ、歴史家はすべての歴史的出来事は一回限りの出来事であると考えているからである[3]。

こういった違いを踏まえて、歴史家は一般化の努力、すなわち時代や地域を越えて適用できるような一般的法則を導き出す努力を怠っていると批判されることがある。しかし、それに対してアメリカを代表する歴史家の1人であり冷戦史の専門家であるジョン・ルイス・ギャディス（John Lewis Gaddis）は、あらゆる時代や地域に適用できる法則を導き出すことは困難であると

2 デイヴィッド・A・ウェルチ「『個人の性格』を過小評価してきた国際政治学――ウクライナ戦争が提起する5つの論点（中）」『Webアステイオン』（https://www.newsweekjapan.jp/asteion/2022/12/5-1.php）（閲覧日：2023年1月23日）。

3 アメリカの研究者たちも理論研究と歴史研究の関係について強い関心を持っている。代表的な研究として、コリン・エルマン／ミリアム・フェンディアス・エルマン編（渡辺昭夫監訳／宮下明総・野口和彦・戸谷美苗・田中康友訳）『国際関係研究へのアプローチ―歴史学と政治学の対話―』（東京大学出版会、2003年）を参照。

主張している。

だが、歴史学者の理論不信へのもっとも説得力のある理由は、我々が理論の中にキャッチ=22（同名の米国の演劇・小説に登場する、あちらを立てればこちらが立たずという状態に陥らせる不条理な軍規）が潜んでいるのを感じとることにある。理論家は、単純な出来事について普遍的に適用可能な一般理論を構築しようとする。しかし、もしこうした出来事が複雑になると、一般理論は普遍的に適用できなくなる。したがって、我々から見ると、理論が正しい場合にはその理論はがいして当たり前のことを証明しているにすぎない。当たり前のこと以上のことを言おうとすると、理論はたいてい間違っている。歴史学者は、全く違った方法を採る。すなわち、複雑な出来事を再構成するために、叙述（narratives）を作り上げるのである。そうすることで、我々は一般化を進めるとともに、一般化を覆す。人生は複雑なのだから、歴史も複雑なのである[4]。

政治とは人間が動かすものである。そして、すべての人間のすべての行動原理を解明することは極めて困難である。したがって、ある政治的な出来事が起こる要因を、時代や地域を越えて当てはまるような理論で説明することは同様に極めて困難なのである。

他方で、理論研究に意味がないわけではない。例えば、国際政治学における重要な理論の1つとして、攻撃的リアリズム（offensive realism）というものがある。これは、国家は自国の安全保障を確保するためにパワーの最大化を試みるという理論である。なぜなら、パワーというものは相対的なものであり、どれだけのパワー、より細かく言えば軍事力があれば自国の安全保障を確保できるかわからない以上、国家にとっては自国のパワーを最大化することが合理的であるからである。

この攻撃的リアリズムは時代や地域を越えた普遍的なものであるが、他方で現実の国際政治の出来事をすべて説明できるわけではない。このような点に対して攻撃的リアリズムの提唱者である国際政治学者のジョン・J・ミアシャイマー（John J. Mearsheimer）は、攻撃的リアリズムは暗い部屋の中を照らす強力な懐中電灯のようなものであると主張している。部屋の隅々までを照らすことはできないが、それでも我々が暗闇の中を進むうえで大いに役立つからである[5]。

つまり、攻撃的リアリズムのような大きな理論が巨大な懐中電灯であるとすれば、歴史的な叙述はそれだけでは照らしきれない部分を照らす小さな照明のようなものであるといえる。大きな明かりと小さな明かりにそれぞれ優劣はなく、この双方を活用することで国際政治という暗い部屋を可能な限り照らすことができるということである。

この点において、日本の国際政治学の特殊性が活きるといえる。すなわち、日本では理論研究や統計研究に加えて歴史研究も国際政治学として一括りにされるため、互いの欠点を効果的に補うことが可能であるということである。例えば、ロシアのウクライナ侵攻を例にとってみれば、攻撃的リアリズムでロシアの行動の多くを説明することができる。ウクライナを占領することは同地域を北大西洋条約機構（North Treaty Atlantic Organisation: NATO）に対する防波堤にすることを可能にするからである。

しかし、他方で攻撃的リアリズムのような大きな理論だけでは、なぜ2022年2月24日にあのような形で侵攻が始まったかということまでは説明できない。こういった時に、個人の役割を重視する歴史研究が重宝する。ウェルチが主張するように、もしエリツィンやゴルバチョフが現在のロシアの指導者を務めていた場合、2022年2月24日にあのような形でウクライナを侵攻していた可能性は低いからである。そこで、プーチンという個人の性質や考えに着目することが重要になる。

このようにして、理論研究や統計研究と歴史研究にはそれぞれ長所と短所がある。したがって、どちらがより優れていてどちらかが劣っているということはなく、分析する事例に応じて分析手法を柔軟に組み合わせていくことが重要であるといえる。また、日本の国際政治学の特殊性はこのような点において有用であると指摘することができる。

3 歴史学の終わり？

最後に、歴史学そのものの有用性について言及したい。客観的な歴史など存在するのか、そして、も

4 ジョン・ルイス・ギャディス「限定的一般化を擁護して―冷戦史の書き直しと国際政治理論の再考―」コリン・エルマン／ミリアム・フェンディアス・エルマン編（渡辺昭夫監訳／宮下明総・野口和彦・戸谷美苗・田中康友訳）『国際関係研究へのアプローチ―歴史学と政治学の対話―』（東京大学出版会、2003年）、199頁。

5 ジョン・J・ミアシャイマー（奥山真司訳）『新装完全版　大国政治の悲劇』（五月書房新社、2021年）、41頁。2003年）を参照。

し客観的な歴史が存在しないとして、歴史研究に価値はあるのかという問題はこの数十年間で重要なものになった。その中でも最も重要なものが、1980年代頃からその影響力を増したポストモダニズム（postmodernism）を支持する研究者による批判である。ドイツ史の専門家であり、ポストモダニズムと歴史学の関係に関する代表的な研究である『歴史学の擁護』を著したリチャード・J・エヴァンズ（Richard J. Evans）は同書において、「今や『歴史とは何か』ではなく、『そもそも歴史研究は可能か』が議論の焦点になっている」と述べている[6]。

ポストモダニストの歴史学者に対する最大の挑戦は、彼らはすべての歴史はフィクションに過ぎないと主張したことである。ポストモダニストの代表的な論者の1人であるジャック・デリダ（Jacques Derrida）は、言葉とは相対的なものであり、すべての言葉は「テクスト」であると主張している。エヴァンズはデリダの主張を以下のようにまとめている。

> それに対してジャック・デリダのようにその後に続いた理論家は、論をさらに推し進めて、言葉が発話されるたびに相互関係は変化していくと論じた。言語はそれゆえ「意味表示の無限の戯れ」のさまを帯びることとなった。それ自体で意味を決定する「超越的な意味されるもの」などもはや存在しえない。すべては言葉の組み合わせにすぎず、すべてのものは「言説」ないし「テクスト」となっていった。言葉の外部に存在するものなど、何もない。われわれが世界を認識するのは言葉を通じて以外にありえないのであるから、すべてのものはテクストと化すのであった[7]。

確かにデリダの主張は、言葉の解釈というものはある程度恣意的なものであり、したがって完全に客観的な歴史など存在しないということを明らかにしたという点で大きな価値がある。しかし、他方で言葉の解釈の仕方は無限に存在するという見方は行き過ぎである。

例えば、「明日の天気は晴れです」という文章を「今日の晩ご飯はカレーにしよう」と解釈することは極めて困難である。明日の天気の話と今日の夕食の話には関連性がないからである。もちろん、翌日の天気が晴れの場合にはその前日の夕食にカレーを食べる習慣がある人物の発言であるのなら、上記のような解釈は意味が通るが、そのような人物は一般的に見て少ない。このように、言葉や文章の解釈は文脈によるため、文脈に存在していない意味を見出すことは不可能である。

また、日本の文豪である夏目漱石が、'I love you' をどう訳せばよいかと聞かれた際に、「月が綺麗ですね」と訳せばよいと答えたという有名なエピソードがあるが、このエピソードも文脈の重要性を強調している。多くの人は、愛する人と綺麗な月を眺めるという行為を望ましいものであるとみなすであろう。少なくとも、夏目漱石はそう考えていたということがこのエピソードからはうかがえる。また、このエピソードが現代まで語り継がれていることからも、夏目漱石の考えは多くの人に受け入れられていると指摘することができる。もちろん、夏目漱石の考えがあまりにも頓珍漢であったからこのエピソードが語り継がれていると解釈することも他方で可能である。

エヴァンズも、完全に客観的な歴史は存在しないことを認めながらも、歴史家の努力によって可能な限り客観的な歴史を書くことは可能であるし、それが歴史家の使命であると主張している。

> 歴史学は経験的な学問であり、知識の本質よりもむしろ内容の方が問題になる。利用できる史料があり、それを扱う方法が確立していて、しかも、歴史家が注意深く入念であれば、過去の現実を再構築することは可能である。それは部分的・暫定的なものであり、確かに客観的とはいえないかもしれない。それでもなお、それは真実である。（中略）私は慎ましく過去を見つめ、そして彼らすべてにこう反論したい。過去の出来事は現実に起こったのである。したがって、歴史家が十分慎重で、注意深くあり、自己批判に徹するならば、その出来事がどのようにして起こったのかを見つけだし、たとえ過去を解明しつくした最終結論に達することはできなくとも、批判に耐えうる結論にいたることはできるのだ、と[8]。

エヴァンズが主張しているように、歴史家の努力次第でより客観的な歴史を書くことは可能である。したがって、ポストモダニストによる挑戦は歴史家に自身

6　リチャード・J・エヴァンズ（今関恒夫・林以知郎監訳／佐々木龍馬・與田純訳）『歴史学の擁護―ポストモダニズムとの対話―』（晃洋書房、1999年）、2頁。
7　同上、78頁。
8　同上、195～198頁。

の方法論に対する内省を促し、それが歴史学の発展につながったと言うことができる。

ここまで論じてきたように、歴史研究はかなりの程度主観的なものであり、とりわけ外交史は個人の内面に着目することが多いため、特定の人物の行動や発言に対する解釈が異なることは多い。しかし、ロシアによるウクライナの侵攻のような問題の起源を分析するうえで、プーチンのような個人に着目することは不可欠である。そのため、エヴァンズが主張するような自己批判に徹した歴史研究と理論研究や統計研究を組み合わせることで、複雑で難解な国際政治を多角的に分析することが必要である。

4 おわりに

日本の国際政治学はアメリカやイギリスのものとは大きく異なる。その最大の違いは、アメリカやイギリスでは歴史学の一部として扱われている外交史研究が日本では国際政治学の一部に含まれていることである。このような日本の国際政治学の特殊性は、ロシアによるウクライナ侵攻のような事件の起源を明らかにするうえで有用である。

なぜなら、ウェルチが主張するように、現代の国際政治学者の多くは個人の役割を軽視しすぎたからである。理論研究や統計研究は個人の役割を重要視しないが、ロシアによるウクライナ侵攻においてプーチンが決定的な役割を果たしたということは否定できない。このような場合に、個人の役割に着目することが多い外交史の手法が役に立つのである。

他方で、外交史をはじめとする歴史研究の手法にも欠点がないわけではない。その最大の欠点は、理論研究や統計研究に比べて客観性に劣ることである。歴史研究における客観性の問題は、ポストモダニストによって批判された。彼らは、歴史研究はフィクションに過ぎないと批判したのである。しかし、エヴァンズが主張するように、確かに完全に客観的な歴史は存在しないが、歴史家の不断の努力によってより客観的な歴史を書くことは可能である。したがって、歴史家は決して驕らず日々研鑽に努めて歴史の分析の腕を磨くべきである。

本稿で論じてきたように、日本の国際政治学の特殊性は歴史研究・理論研究・統計研究のそれぞれの短所を補うことができるという点において有用である。日本の国際政治学者はそのような特殊な観点を用いて、アメリカやイギリスの学者とは異なる見方で国際政治を分析することによって、国際政治の研究に貢献すべきである。

参考文献

デイヴィッド・A・ウェルチ「『個人の性格』を過小評価してきた国際政治学――ウクライナ戦争が提起する５つの論点（中）」『Web アステイオン』（https://www.newsweekjapan.jp/asteion/2022/12/5-1.php）（閲覧日：2023 年 1 月 23 日）。

リチャード・J・エヴァンズ（今関恒夫・林以知郎監訳／佐々木龍馬・與田純訳）『歴史学の擁護―ポストモダニズムとの対話―』（晃洋書房、1999 年）。

コリン・エルマン／ミリアム・フェンディアス・エルマン編（渡辺昭夫監訳／宮下明総・野口和彦・戸谷美苗・田中康友訳）『国際関係研究へのアプローチ―歴史学と政治学の対話―』（東京大学出版会、2003 年）。

E. H. カー（原彬久訳）『危機の二十年―理想と現実―』〔電子書籍版〕（岩波書店、2015 年）。

ジョン・J・ミアシャイマー（奥山真司訳）『新装完全版　大国政治の悲劇』（五月書房新社、2021 年）。